哲學研究　第百二號

內部知覺について

西田幾多郎

一

知覺的判斷の主語となるものは、所謂論理的主語ではなくして、實在であると考へられる。而して我々が物を知るのは、現在に於てそれを知るのである。外部知覺に於ては、內部知覺に於ての樣に、此極限に接近することはできないとしても、外部知覺に確實性を與へるものも、この現在意識でなければならぬ。判斷の主語と考へられるものと、知る自己とは如何なる關係に於て立つのであらうか。論理的主語、形而上學的本體、認識主觀の間には如何なる關係があるであらうか。

我々は種々なる意味に於て有といふものを考へ得るであらう。アリストートルはその主なるものとして essence, universal, genus, substratum との四つのものを數へ、その中先づ眞の實在と考ふべきものは主體 substratum であらうと云つて居る。主體とは如何なるものであるか。アリストートルは之を定義して Now the substratum is that of

which the others are predicated, while it is itself not predicate of anything else と云ふ。それでは、如何なるものが、いつも判斷の主語となつて、述語とはならないものであらうか。それは何處までも限定せられたるもの、卽ち一あつて二なき個物と考へねばならぬであらう。何等かの意味に於て一般的なるものは、他の述語となすことができる。唯一なる個物は自同律の形に於て自己自身の述語となり得るだけである。何年何月何日ルビコンを渡つた人はシーザであり、シーザは何年何月何日ルビコンを渡つた人である。右の如き個體概念は如何にして成立するか。私はかゝる個體概念の根柢には、何等かの意味に於て非合理的なるものの直覺がなければならぬと思ふ。合理的なるものは一般的であり、非實在的である。直覺とは種々に解せられるであらうが、我と物との一致、知るものと知られるものとの合一といふことである。一致とか合一とか云へば、尙主客對等の樣に思はれるが、直覺の眞の意義は我が物の中に沒入することであり、客觀の中に主觀が含まれることでなければならぬ、否單に自己を沒入するのではなく、客觀の中に自己を見出すことでなければならぬ。直覺の概念化せられたものが個體概念である。眞の直覺は分割することのできない連續でなければならぬ。或一つの物についてその性質を判斷して行く時、その物の直覺が

基礎となつて居なればならぬ、無關係の判斷を結合して物の概念を構成することはできぬ。此の如き直覺を判斷の形に現したものが自同的判斷である。性質的判斷は、かゝる自同的判斷を基礎として構成せられると考へることができる。此統一が要素に分解し盡さるれば個體ではなくなる。直覺といへば、その時々の單純な意識であつて、思惟によつて統一せらるべき材料となるものと考へられるのであるが、感覺又は知覺といふものが、切れ切れのもので、その間に何等の統一性を有せないならば、物の概念といふ樣なものは成立し樣はない。性質的に同じいものは一つの不變なるものと考へ得るでもあらう。併し之より種々なる性質を有つた物の概念は、成立し得ない。かゝる物の概念の成立するには、時空の上に於ける種々なる感覺的性質の間に、不變なる關係が見られなければならぬ。此の如き場合、我々はかゝる統一は考へられたものと云ふ。併し物の形といふ樣なものは考へられたものではなくして、直覺せられたものでなければならぬ。色と空間とは抽象的思惟によつて分つことができるが、具體的知覺としては離すことはできない。而してかゝる空間は異なれる感覺にも共通である、單に視覺の間に共通なるのみならず、觸覺にも共通と考へられる。かゝる空間の統一によつて一つの物の形が考へられるのである。かゝ

る空間の統一は單に考へられたものではなく、その根抵に直覺せられたものがなければならぬ。直覺するといふのは、感覺するといふのではない、直覺には無限の次位があるのである。我々はかゝる統一を主語として、種々の屬性を述語するのである。無論形を不變と考へることもできれば、又質料を不變と考へることもできるであらう。いづれが代表的地位に立つとしても、兩者の統一が基礎とならねばならぬ。

何處までも主語となつて述語とはならない主體といふのは、限りなき述語の統一でなければならぬ、卽ち無限なる判斷を統一するものでなければならぬ。判斷と判斷とを統一するものは、判斷以上のものでなければならぬ、我々の判斷作用が無限に之を志向するが、之に達することのできない對象でなければならぬ。私はかゝるものを直覺と考へるのである。その根抵には、對象化することのできない作用の作用の立場がなければならぬ。所謂感覺といふ如きものは、かゝる意味に於ての直覺ではない、感覺的性質といふ如きものは單に一般的なるものに過ぎない。アリストートルは實在は形相と質料とから成つて居ると云ふが、單なる質料は一般的たると共に單なる形相も一般的たるを免れない。主語となる本體は兩者を結合するものでなければならぬ。質料が可能であり、形相が現實であるとすれば、此兩者は連續せる

一つの作用でなればならぬ。物とはライプニッツの考へた如く、何處までも限定せられた、一あつて二なきものと考へねばならぬのであるが、如何に多くの屬性を有し居るとしても、それが單に結合に過ぎない以上、それは尙分解し盡すことのできるものであり、尙限定し得る餘地のあるものと云はねばならぬ。眞に限定せられた一あつて二なき個體は、思惟を超越せる立場に基かねばならぬ。超越的立場に基くが故に、未來永劫分析することのできないものと云ふことができるのである。單に我々の內部知覺の對象として、直接に知り盡され得る出來事であつても、それが繰り返すことのできない、唯一の出來事と考へられるには、その基に超越的なるものの直覺がなければならぬ。之によつて、それは何時でも考へることのできる客觀的事實となるのである。

アリストートルの如く主體といふものを考へて行けば、限なき述語の主語となる本體は、形相でもなく、質料でもなく、發展的個體でなければならぬ。作用の連續といふ如きものでなければならぬ。我々はこの連續的統一を主語として、之に述語を附加するのである。此の如き連續的統一の基には、前に云つた如く直覺がなければならぬ。之によつて何處までも述語とならない唯一の物が成立するのである。而し

て此の如き直覺が判斷意識に對して達すべからざるものである限り、卽ち分析すべからざるものである限り、超越的として外に見られねばならぬ。超越的なる主體とは、斯くして成立するのである。併し判斷と直覺とは如何なる關係に於て立つのであらうか。判斷と直覺とは異なれるものと考へられるが、如何なる判斷の基にも直覺がなければならぬ。例へば色の判斷といつても、その根抵に色の直覺がなければならぬ。物の色を赤といふ時、我々はそこに赤といふものを直觀するのである。物を離れて赤其者を見るのである。かゝる意味に於ては、抽象することは一方に於て直觀することである。言語といふものが抽象的な意味を荷ふものと考へられる。併し言語といふのは表現作用である、然らざれば單なる音聲に過ぎない。表現作用によつて物を離れて理念的なるものを見るのである。藝術に於ての如く、すべて表現作用は單なる運動ではなくして見ることである。右の如き意味に於ける赤の直觀は判斷を超越したものでなければならぬ。判斷せらるゝと否とに關せず、赤は赤自身に同一でなければならぬ、之を判斷の形に言ひ表せば自同的判斷の形を取るの外はない、自同的判斷は直覺と思惟との結合するものと考へることができる。併し右の如く考へ得ると共に、此色は赤であると云ふ樣に、すべて性質的なるものは述語

として考へることができる。述語としての赤と自同的赤とは如何なる關係に於て立つであらうか。

アリストートルは形而上學第十二篇の始に於て、次の樣なことを云つて居る。感覺的本體 sensible Substance は變する。併し聲が白くなるといふ樣に、全く異なる性質に變するのではない。白い物が黑くなるといふ樣に、その反對に移り行くのである。斯く變するには、變する物がなければならぬ。それが質料である。質料が相反する兩方の狀態を取り得るのである。而してすべて物は無から有となるのではなく潛在から現實に移り行くのであると云ふ。私は今アリストートルの質料の意義を穿鑿するのではないが、此の如き質料とは如何なるものでなければならぬかを考へて見たい。白といふも色であり、黑といふも色である。白が黑に變するといふのは如何にして可能であるか。色自身の變化は何處から起つて來るか。直覺的なる色の變化は色自身の內に求めるの外はない。プロチノスの云つた如く、衝くとか引くといふことから色といふ樣なものの生じ樣はない。若し質料が種々なる色の狀態を取ることができ、此等すべてを色といふことができるとするならば、色は色自身の述語となるといふの外はない。或は空間が本體として色を有つとも考へ得るでもあ

らう。併し色と空間とは別々に變することができる。空間なくして色を表象することは不可能であらうが空間が色の本體として色を有つといふことはできないであらう、單に缺くべからざる條件に過ぎない。潜在より現實に變するものは、空間ではなくして色自身でなければならぬ。是に於て力といふ樣なものが考へられるのであるが、物理學者の云ふ如き力とは唯說明の爲に設けられた假定に過ぎない。それよりも現實の色の變化が根本的でなければならぬ。眞に內在的なる力とは色自身の內面的連續でなければならぬ、形相と質料とが一となつたものでなければならぬ。我々はかゝる內面的連續の一點を主語として、之について白とか黑とか云ひ得るのである。此場合、色以外の何物かが主體として白とか黑とかいふ述語を有すると考へることはできない。此の如き外的なるものが變するといふことは、色が變すると云ひ得ないのである。或は物が種々なる性質を有し、前には白といふ性質を取つて居たが、後に黑といふ性質を取つたと考へ得るでもあらう。併し此の如き物は先づ色といふ性質を有つたものでなければならぬ、而してその色が白から黑に變じたと云ふことでなければならぬ。我々が白とか黑とかいふのは、此等の性質を有つたものに就いて云ふのではなく、此等の性質について云ふのである。物が白いので

はない、物の色が白いのである。色の主體は色自身の體系でなければならぬ。之を力とか作用とか云へば、既にその當を失つて居る、色を生する力が白いのでも黑いのでもない。性質的なるものは單に定立 setzen の對象となるものでなければならぬ、卽ち單に定立せられたもの das Gesetzte でなければならぬ。此の如きものに就いて我々は之を白とか黑とか述語することができるのである。アリストートルは範疇論に於て第一本體は他の述語となることなく、又他に於てあるものでもないと云つて居るが、眞にかゝる意味に於て本體と稱すべきものは、考へることのできないものでなければならぬ。我々の考へ得るものは、少くとも第二本體の如きものでなければならぬ。物に於ては、性質は本體に於てあり、之によつて有せられると考へられるが、直接の經驗に於ては、性質的なるものが、自己自身の內にあるのである、定立とは性質的なるものが自己自身に還ることを意味する、自分自身の述語となる一般的なるものがその本體となるのである。判斷は此の如き一般者によつて成立し、判斷の主語とは、此の如き一般者其者でなければならぬ。白から黑に變し行く時、その質料と考へられるものは、此の一般者であるのであらう。

前に云つた如く眞に何處までも述語となることのできない主體といふものは、却

つて判斷の主語となることはできない極限概念に過ぎない。我々の考へ得るものは寧ろアリストートルの第二本體の如きものと云ひ得るであらう。此色は赤であると云ふ時、我々は「此」を主語として居るのではない、或限定せられた赤を主語として居るのである。その赤は性質的なるものでなければならぬ、述語となり得るものでなければならぬ。我々は質料を主語として居るのではなく形相を主語として居るのであると云ひ得る、卽ち一般的なるものが主語となつて居るといふことができる。無論、此赤といふ特殊なるものを主語として、之に就いて一般的赤が述語となると云ひ得るであらう。併し我々が此赤と云ふ時既に色の概念によつて、一般化して居るのである。述語するといふことは、一般的なるものが自分自身の内に省みることである、概念がその本質に還ることである、ヘーゲルの云ふ如く判斷は概念自身の分化といふことができる。すべての判斷の根柢に自己自身に同一なるものがあるのであらう、個物的なるものがあるのであらう。その内容が單一なる時、自同的判斷に於て見る如く、自己自身の述語となる如く考へられ、その内容が多樣なる時、包攝判斷に於ての樣に、主語と述語とが分れたものと考へられる。併し此場合に於ても、一般的なるものが自己自身に就いて自己を敍述するのである。判斷は一般的なるものが

自分自身を敍述するより始まると云ふことができるであらう。

九

私は本体とは如何なるものなるかを考へ、又判斷の主語とは如何なるものなるべきかを論じて見た。嚴密なる意味に於て何處までも述語とならないもの、卽ちアリストートルの第一本体といふ如きものは、我々の認識を超越したるものでなければならぬ。判斷の主語として、之について何等かの述語を附加し得るものは、自己自身に同一なるものとして、少くも自己自身の述語となるものでなければならぬ。而して自己自身に同一なるものは既に一般化せられたものと云ひ得る。眞に一般的なるものは、自己自身に同一なるものである、自己自身を質料とし、自己自身について述語するものでなければならぬ。判斷とは一般的なるものの內面的發展と考へることができる。而して自己が自己を對象として之を知ることが、眞の直觀であるとするならば、すべての判斷の基に直觀があると云ふことができるであらう。

併し此の如き判斷の主語となるものと、働くものとは如何なる關係に於て立つであらうか。判斷の主語となるものと知的主觀との關係を明にするため、先づ「働くも

の」といふものを考へて見なければならぬ。希臘人は形相を以て能働的原理と考へた。併し我々が働く場合、何等かの形相に依るであらうが、形相が直に働くものとは云はれない。建築家の頭にある形相が直に家を建てるのではない、又或一つの植物を形成する形相は單なる判斷の主語以上のものでなければならぬ。無論、物が生するといふのは、通常の因果律によつての如く考へるを要せないであらう。數理を考へるといふことは、數理自身の內面的發展と考へられねばならぬ如く、色を視るといふことも、色自身の內面的發展でなければならぬ。考へるといふことが、思惟が思惟自身を見ると云ひ得るのみならず、見るといふも色が色自身を見ると云ふことができるでもあらう。自己自身の內容を主語とし、質料なき形相となる時、それが純なる作用と考へられる。併し單に判斷の對象たる形相は直に作用ではない。プラトーは「ソフイスト」に於て、無と考へられるものも、異なれる一種の有であると論じて居るが、私は眞に有るものは、有るものと、無いものとを含んだものでなければならぬと思ふ。一般的なるものが、單なる概念であるか、本体であるかは、此の無を含むと否とに由ると考へる。或物に對して他なるものも亦或物である、之より見て前の或物は他なるものとなる。此の如き或物と他なるものを含むものは、何處までも所謂一般的

概念たるに過ぎない。構成的概念は自己の有限なる內容とその否定とを含まねばならぬ斯くあるといふこと、その否定との綜合でなければならぬ。或物に對して或物でないものも、一種の無と云ひ得るでもあらうがそれは單に同種の有に過ぎず、赤に對して赤でないものも尙色である。働くものは、自己の中に自己の內容を超越したものを含んで居なければならぬ。赤の知覺作用が赤とは云はれない、視覺作用について色を述語とすることは無意義である、而も色は視覺作用によつて成立すると考へざるを得ない。働くものとは無限なる內容を潛在的に含むものと考へることができるが、潛在的なるものは働くものではない、何處までもそれは或物に對する他のものに過ぎない。アリストートルの如く、白より黑に變するもの、無限に連續的なるものを考へて見ても、我々は之に就いて述語し得るものであつて、尙質料たるを免れない。眞に働くものは常に述語となすことができないのみならず又主語となすこともできないのでなければならぬ、主語となるものは又述語となるものである。變するものは尙働くものではない、働くものは自ら變するものでなければならぬ、それは有といふことすら云へない。プラトーは「パルメニデス」に於て、物が互に類似するといふのは、類似の理念に倣ふと考へねばならぬ。併し物が理念に倣ふといふこ

とは類似することであり、かゝる類似を成立せしめる類似の理念がなければならぬと云つて居る。單なる理想は理念ではない、類似の理念は非類似と離れたものでなく、類似と非類似との統一でなければならぬ。然らば、それは類似の理念とも非類似の理念とも云ひ得ないかも知らぬが、私は類似と非類似とを分つものが亦類似の理念による時、之を類似の理念と稱し得るではないかと思ふ。我に對して非我が對立するが、此對立を知るものは亦我なるが故に、之を非我と云はずして我と云ひ得ると同樣であらう、自分と他とか自分に於て區別せられるのである。此の如きものにして、始めて自己自身を質料とする純なる形相といふことができる。一といふものに就いても、一に多が對立するが、此對立を成立せしめるものは亦一つである。有の根柢にも此の如きものを考へ得るであらう、有と無とを對立せしめるものは亦有でなければならぬ。類似と非類似とを區別する類似の理念は何物にも類似せざるものである、有無を區別する有の理念は何處にもないものである、此意味に於て無と考へることができる。併しすべての根柢としてそれは又全体と考へることもできる。赤の知覺は赤でないといふ樣に、眞に働くものは、性質を述語とすることはできないが、性質は之によつて成立するのである。性質的なるものが自分自身の上に立つ時、

それが純なる作用となるのである。此作用をその性質によつて名づけることができるのであらう。

認識主觀とは如何なるものであるか。何等の心理的意義を有せない認識主觀といふのは單なる限界概念に過ぎない。かゝる考を徹底すれば、認識主觀は全く作用の意義を失ひ、單に認識對象界の統一といふ如きものとなるであらう、主觀の意義をも失ふこととなる。何等の意義に於ても、有の述語を附加することのできない主觀は主觀ではない。無論、我々は反省によつて自己を認識對象として見ることができるであらう。我々は個人的自己を考へることができ、更に超個人的自己といふものを考へる事もできる。併し縱、此の如き對象は單に客觀的なるものと異なるとしても、それは認識主觀ではない。我々が現在の自己反省から出立して之を何處まで押しつめて見ても主觀を超越することはできない所に、何處までも客觀とならざる認識主觀の意義があるのである。カント哲學の立場からしては許すべからざる考であらうが、認識主觀は主觀たるが故に、何處までも有の意義を離れることはできぬ。時間空間の範疇に當嵌つたものが有であるとすれば、認識主觀を有と考へるのは自家撞着と云ひ得るであらう。併し與へられた材料を統一して實在界を構成する認

識主觀は、同時に經驗內容を與へる主觀でなければならぬ。單なる思惟の形式によつて實在界が構成せられるのではない、形式と內容との結合によつて實在界が成立するのである。與へられたものの構成として、否その說明として我々は所謂實在界を見るのである。主觀によつて造られたものでなく、與へられたものの一面と考へられることによつて、實在性が與へられるのである。非實在的なるものが與へられ、それが形式によつて實在的となるのではない。我々が實在を知るといふのは單に何人も斯く考へなければならぬと云ふのみでない。實在の知識には何等かの意味に於て自己以上のものとの關係が含まれて居なければならぬ。カントは認識とは雜多なる所與の統一であるといふが、主觀的形式の綜合統一のみによつて實在界の知識は成立し得ない。カント自身も云つて居る如く感覺內容との結合がなければならぬ。與へられたものは、單に形なき雜多ではなく、それ自身が一つの体系でなければならぬ。我々は自己の深い奧底に還ることによつて、實在を見るのである。自己に全然外的なるものは自己に對して客觀的必然性を有しない、眞の實在は自己自身を蔽ひ包むものでなければならぬ。單に我に對して與へられるものではなくして、思惟作用其者の基を成すものでなければならぬ。直接の經驗內容は時の形式によ

つて與へられると云ふならば、働く我は時の中になければならぬ、我は時の中に於て思惟するのである。實在界は思惟によつて與へられたるのではなく、見るとか聞くとかいふことによつて與へられるのである。而して見るとか聞くとかいふことは働くことである。思惟によつて眞理が內在的となると考へられる如く、働くことによつて實在が內在的となると考へることができる、否我が眞理に歸し、我が實在に歸するのである。我々はいつでも全我を沒し尽して、主客合一の所に有を見るのである。繫辭の「ある」と、物があるの「ある」との區別すべきことは云ふまでもないが、判斷の根柢には自己自身に同一なるものの、卽ち直覺がなければならぬ、働くものゝ自覺がなければならぬ。而して眞に有といふべきものは、自己自身に同一なるものの外にない。存在するものは判斷の主語として判斷の基礎を成すものでなければならぬ。云ふまでもなく、事實は永久眞理の基礎とはならない、併し事實眞理に於ては、事實なるが故に、一般妥當性を有するのである。論理的主語の根柢に主体がなければならぬ、一般眞理の根柢にも此の如き主体がなければならぬ。兩者の區別は一般性と唯一性とにあるのである。プラトーが「パルメニデス」に於て云つて居る樣に、有と統一とは離すことのできないの概念である。空間時間が實在の形式と考へられるのも、

思惟を超越する無限なる統一なるが故でなければならぬ。

右の如く考へ得るならば、認識主觀は非實在的ではなく、却つて眞に實在的と云ふことができる。眞に實在的なるが故に、認識主觀となると考へることができる。繫辭の「ある」は存在の「ある」に依存すると考へることができる。アリストートルの云ふ如く、他の範疇の有は本体の有に從屬するのである。私は多くの反對を豫期しつゝも、認識主觀の背後に、自分自身に於てあり、自分自身によつて理解せられるスピノザの本体を認めたいと思ふ。自分自身によつて理解せられる本体は我々の認識の基礎となるものでなければならぬ。種々なる形は空間に於て成立するも、空間其者の形を論ずることはできない。此の如き意味に於ては、空間は形なきものと云ひ得るが、一方から云へば無限の形が之に於て成立する形以上の形を有すると云ひ得るのであらう。

五

上に論じた如き譯であるから、私はカントの認識主觀の背後に、主語となつて述語となることなきアリストートルの主体を認め得るではないかと思ふ。アリストー

トルの本体の考を徹底すれば、質料なき純なる形相とならねばならぬ、純なる形相は純なる作用でなければならぬ、形相と質料との對立が、現實と潜在との對立に進み行くのは自然の勢である。斯くしてアリストートルの本体はまたプラトーのイデヤに近づき行くと考へることができる。眞理の本体は同時に實在の本体でなければならぬ。アリストートルもSubstance is the starting-point of all production as of syllogismと云つて居る。通常、時間空間因果の形式に當嵌つたものを實在と考へて居るが、我々は一層深く、何故にかゝるものが實在と考へられねばならぬかを考へて見なければならぬ。而してその根柢に主語となつて述語となるなき本体の意義を認め得るならば、實在の意義は廣げられ、すべて純なる形相といふべきものが眞の實在でなければならぬ、理念的實在の上に經驗的實在が立つといふことができる。私はかういふ意味に於て完全なるものは存在するといふ本体論證明にも深い意味を認めざるを得ない。万物がそれに於て存在すると考へられる無限の空間も、一種の理念でなければならぬ。所謂經驗界の構成はその綜合統一に由ると考へられる認識主觀は、純なる形相の形相として唯一の本体ともいふべきものであらう。

アリストートルはプラトーに反して個物を本体と考へた。我々が時間、空間、因果

の範疇に當嵌つたものを實在と考へるのも個物を實在と考へるのである。ショーペンハウエルの云つた如く時間空間はprincipium individuationisである。個物とは如何なるものであるか。感覺的實在に於ては物は形相と質料とから成立ち、質料によつて物が個物となり實在となると考へることができる。例へば、同じ大さの球が鋳からも鑄られ、銅からも鑄られることによつて、個々別々の實在となるのである。併し銅とか鋳とかいふ樣な、球と全く異なつたものが、如何にして球を個物化することができるか。此球といふ時、その主語となるものは形相であつて、質料ではあるまい。而して單なる形相から云へば、鋳球も銅球も同じ幾何學的球であつて、更に特殊化せられて居るのではない、而して單なる幾何學的球としては非實在的たるに過ぎない。私は是に於て鋳や銅の質料が形相を個物化すると考へられるのは、それ等が幾何學的形相に外から偶然的に加はる故ではなく、一層深い立場から之を特殊化する故と考へなければならぬと思ふ。鋳や銅の性質は單に性質としては、何等の本體的意義を有たぬ。非本體的なるものに、非本體的なるものを加へても、本體的とはならない。唯右の場合、鋳や銅は質料として主語となつて述語となることなき主體の役目を演するまでである。形相に對して眞に質料と稱すべきものは、その特殊化の原理でな

ければならぬ。特殊は一般の中に包攝せられると考へられるが、かゝる特殊は眞の主體となることはできぬ。眞の主體は非合理化的なるものの合理化せられたものでなければならぬ、判斷の述語とはならないが、而もその主語となるものでなければならぬ。述語することができないと云ふ意味に於ては、それは不可知的と云ひ得るであらう、不可知的なるものは無とも云ひ得るであらう。併しかゝる意味に於て不可知的なるものを可知的と考へざるを得ざる時、かゝる意味に於て無なるものを有と考へざるを得ざる時、眞の個體卽ち本體の考が成立するのである。今鋏や銅の球について云つた形相と質料との關係を何處までも推し進めて考へて見よう。すべて何等かの意味に於て知識內容となるものは、一般的なるものでなければならぬ、從つて述語となすことのできるものでなければならぬ。すべての經驗內容を否定した時、すべての實在の質料となる第一質料ともいふべきものを見ることができる。すべての事實的判斷に於て實在がその主語となると考へられる主語とは、此の如き第一質料でなければならぬ。カントが「純粹理性批判」第一版の演繹に於て、現象は物自體ではない、單に表象に過ぎない、而して此表象は更に最早直覺することのできない對象を有たねばならぬ、それが超越的對象とも名づくべきものであると云つて居

る。私は第一質料の考の中にカントの超越的對象の意義が含まれて居るではないかと思ふ。カントは我々の經驗的概念が客觀性を得るのは、此超越的對象によるのであつて、此概念は何等の直覺を含まず、知識が對象に關係する限り、之に統一を與へるものである、而して此關係が意識の必然的統一に外ならないと云つて居る。併し超越的對象と一なる純粹統覺が、單に形式的意識であるならば、そこに何等の特殊化の原理を見出すことはできぬ、從つて客觀的知識を與へることはできない。客觀的知識の根元となるには、超越的對象は特殊化の原理を含んで居なければならぬ質料を含んで居なければならぬ。純粹統覺は自己自身の中に質料を有する純なる形相でなければならぬ。卽ち純なる作用として、一つの本體でなければならぬ。カントの超越的對象といふものは、單に意識の必然的統一よりも、深いものでなければならぬと思ふ。認識主觀に對して、所與の意味を有つと考へることができる。斯くして認識の形式は之と結合することによつて、恰も幾何學的球が銅や鐵と結合する如く、客觀性を得るのである。我々の經驗界は此質料から造られることによつて、球が鐵や銅から造られる如く、實在界となるのである。而して木や石が家の質料として潛在である如く、それは本體の質料として根本的潛在でなければならぬ。而してアリ

ストートルの云ふ如く、唯個物のみ個物を生することができる、現實なるもののみ現實を生するとすれば、第一質料の背後に形相の形相ともいふ如き第一動者がなければならぬ。是に於て超越的對象と意識の必然的統一とは合一して一つの直觀となると考へ得るのであらう。

私はアリストートルが主語となつて述語となることなきものを本體となす考から、カントの純粹統覺の背後に、プラトーの理念的存在の意義あることを認めた。併し理念的存在といふ如きものと認識主觀との間には多くの間隙があるであらう。右の如くにして認識の根柢を成すものは判斷の主語たるのみならず、判斷するものでなければならぬ。自分自身に於てあり、自分自身によつて理解せられる本體であるのみならず、自分自身で理解するものでなければならぬ。アリストートルの本體の考から、如何にしてかゝる主觀に到達し得るであらうか。前にも云つた如く第一本體の考は自己自身を質料とする純なる形相の考に到達せなければならぬ純なる形相は純なる作用でなければならぬ。アリストートルの本體は、プロチンに至てプラトーの理念に還るのは、自然の歸結でもあらう。併しかゝる歸結として到達せねばならぬ形相とは如何なるものであらうか。それは復、單に述語となる一般的な形相

であつてはならぬ、若し然らばそれは第二本體に墮するの外はない。かゝる形相は一般的なると共に、何處までも主語となつて述語となることなきものでなければならぬ、卽ち具體的一般者でなければならぬ。我々は空間の如きものに於てその一例を見る。一々の空間は空間として一般的なると共に、一々の空間が限定せられたものとして、主語となつて述語となるなきものである。アリストートルは白が黑に變する時、その背後に主體がなければならぬと云ふが、その主體は色として一般的なると共に、此色として主語となるものでなければならぬ。是に於て、我々は一般的なるものが主語として特殊なるものが述語となると考へることができる。ボサンケーが判斷の主語と考へた實在といふのも、此の如き意味に於ける具體的一般者でなければならぬ。物が性質を有つ、物が働くといふ如き判斷に於て、主語となる物とは一般的なるものが主語として、特殊なるものが述語となるのである。第二本體は述語となるの故を以て、眞の本體ではないと考へられるが、第二本體といへども共通述語 das gemeinschaftlich Ausgesagte ではない、アリストートルの云つた如く、反對を含み得るのである。我々は第二本體に於て一般なるものが、主語として、特殊なるものを含むといふことができるのである。一般的なるものが主語となる時、主語はその唯一性

を失つて、限定すべきものとなる、一つの中心ではなく全體を包むものとなる。而して自己の限定として自己の中に多くの特殊なるものを見るのである。主語としての一般者は空虛なる空間の如く、すべての形を內に含むのである、すべての特殊なる形は之に於て成立するのである。

併し主語としての一般者は尙働くものではない、嚴密には所有者とも云はれない、唯特殊が一般に於てあると云ひ得るのみであらう。働く主體に於ては、質料が單に判斷の主語として主體たるのみならず、形相を含んだものでなければならぬ、特殊なるものが一般的なるものを含んで居なければならぬ。何處までも主語となつて述語とならざる質料は無とも云い得るであらう、此の無なるものが積極的意義を有し、內に形相を含む時、それは働くものとなるのである。家が木や石から造られる時、木や石が質料として潛在と考へられるが、此の如き質料が植物の種子の如く、內に形成原理を藏すると考へられる時、それは働くものとなるのである。一般的なるものが、一般的なるものとして、主語の位置に立つ時、それは尙働くものではない。空間の例に於ての如く、唯すべてがその中に含まれるのである、單に全體である。唯、特殊なるものが、特殊なるものとして、一般的なるものの位置に立つ時、卽ち全體の位置に立つ

時、始めて働くものとなる、偶然的なるものが必然的となる時、働くものとなるのである。或は數學的對象の如きものに於ても、特殊が一般を含むと云ひ得るでもあらう、曲線に於ける點は生產的といふことができる。アリストートルの如く圓が孤線を質料として成立すると云へば、質料が形相を含むと云ひ得るでもあらう。併し此の場合、特殊なるものは、一般なるものに對して、本質的に異なるものではない、卽ち偶然的なるものではない。アリストートルは色が白から黑に變する時、その根柢に主體がなければならぬと云ふが、かゝる主體は先づ一般的なるものと考へられねばならぬ、判斷の主語となるものは色の經驗の體系といふ如きものでなければならぬ卽ち一般的なるものが主語となると考へ得るであらう。物理的世界の如きものであつても、それが物理的アプリオリの上に立つ一つの認識對象界としては、それ自身に於て不變なる眞理の一體系と考へられ、物理的判斷の主語となるものは、一般的なるものといふことができる。アリストートルが本體を本質ト・チ・エン・アイナイと結合する時、第一本體は却つて第二本體に近づくと考へられるが、第二本體が單なる共通述語と異なる所以は、それが一般者として判斷の主語となるにあるのであらう。

判斷の主語となつて述語となることなき主體其者が述語となる一般者であり、一

般者が自分自身について述語する時、一般者が主體となる。此の如き主體に於ては、すべての形相が空虛なる空間に於て成立する如く、無とは全體と合一するものでなければならぬ。理念を本體と考へる時、プラトーの考へた如く質料は無ともなり、空間ともなるのである。全體が無と合致せない間は、全體は抽象的一般たるを免れない、一般の中に特殊を含むとは云ひ得ないのである。之に反し全體と合一する無の背後に、或物を見る時、卽ち無が積極的意義を有する時、眞に特殊が一般を含むと云ふことができる。アプリオリのアプリオリの立場に於て、始めて特殊なるものが一般を含むと云ひ得るのである。球が鐵から造られるか、銅から造られるかは、球の形相に於て全く無關係である、形相の立場からは無に過ぎない。かゝる無が加はることによつて球が特殊化せられ實在性を得る筈はない。唯鐵や銅の性質によつて、無の背後に積極的意義が認められた時、形相が特殊化せられ、鐵の球や銅の球が合成物としての本體と考へられるのである。特殊化の原理として外から加はつた偶然的なるものが、必然的となる時、質料は最早單なる無ではなく質料は潛在となり、形相は現實となるアリストートルが本體と考へた形相は、質料を離れたものではない。如何にして一般の中に特殊を含む判斷から特殊の中に一般を含むといふ實在判斷に到達

することができるのであるか、如何にして無の背後に積極的内容を認め得るであらうか。私はそこに判斷が判斷自身を主語とするといふこと、卽ち判斷自身の反省といふことがなければならぬと思ふ。述語となる一般的なるものが主語となるには、その根柢に主語と述語との合一なる自己自身に同一なるものがなければならぬ。之によつて一般的なるものも本體となることができる、具體的一般者として、一般的なるものも、本體と考へ得るのである。併し斯く考へ得るには、本體は單に主語となつて述語とならないといふ消極的意義を有するのみならず、積極的意義を取らねばならぬ。而して此の如き意識は唯働くものの意識、判斷自身の自省によつてのみ得ることができる。自己は自己自身に同一なるものであるといふ同一判斷とは、働くものの表現である。是に於て主語となつて述語となることもなき本體は働くものといふ考にも進み行くのである。

述語ともなることのできる一般的なるものが、主體となる時、そこに含むものと含まれるものとの關係が成立し更に或一つの立場から無と考へられるものが、積極的內容を有し判斷の主語となる時、そこに種々なる構成的範疇の成立を見得るのであらう。特殊なるものが、何處までも自己の特殊性を維持して而も判斷の主語となる

時、先づ物が屬性を有つといふ判斷が成立すると考へることができる、前に主體としての一般者がその屬性となるのである。アリストートルの如く具體的なるものを本體と考へるには、かゝる範疇によらねばならぬと思ふ。形相と質料とから成る具體的本體は生ぜるものであつて生ぜるものの中には、或は自然により、或は技術により、或は偶然によるものとあるが生ぜるものは皆或働きによつて或物から或物に成つたのである。すべて生ぜるものは質料を有つ之から造られるのである。自然物に於ては、造くるものと造られるものとが一つであるが、藝術品に於ては、此兩者は別である。鐵や銅の球の樣に人工的に造られたものには、本體の意味はない。鐵や銅は圓くもなり、角にもなることができる、質料から見てかゝる形相は偶然的である、圓とか角とかいふことは、鐵や銅を定義すべき必然的述語となるものではない。眞の本体は質料の中に必然的に形相を含んだものでなければならぬ。而も質料の中に形相を含んで尙餘ある時、主語述語を有つといふ思惟の範疇が成立するのである。「有つ」といふのは「ある」と「働く」との中間に位するのである。アリストートルは本体は定義し得るものと考へて居る。而して定義するとは種概念に種差を與べて行くことである、最後の種差を加へることによつて定義となる。かくして定義せられるも

のが、主語となつて述語となることなき本体であつて、種差はその一般性を失つて本体と共に個性的なるものとなる。種差とは他の述語とならいものである。アリストトルは兩足を有つものと人と同一であると云つて居るが、私は白とか黑とかいふ如き一般的性質であつても、或一つの定義の種差となる時、その本体に屬するものとして、唯一性を得ると思ふ。同じ色であつても此物の色なるが故に他の物の色ではないのである。而して最後の種差が單に一般的なるものの分化であつて、最後に於て又最初に返ると考へられる時、一般者が主体となるに過ぎない、「有つ」といふ範疇は成立しない。唯最後の種差が類概念の中に含まれない時、主体が述語となるものを有つといふ判斷が成立するのである。前者に於ては、すべての述語的なるものを個性化する最後の種差其者が一般者の中にあると考へ得るが、後者に於ては、最後の種差が一般的なるものを含むのである眞に持殊なるものが一般なるものを有つといふことができるのである。是に於て潛在と現實との對立が成立する、質料が潛在と考へられ形相が現實と考られる。併しこれだけでは、まだ「働く」といふ範疇は出て來ない。働くといふことは、質料と形相との結合について成立するのである。石や木を用ゐて家を造る場合、形相は建築家の頭にあるといふが考へられ形相が働くも

のではない、働くものは建築家の意志でなければならぬ。生物に於ては、質料と形相とが一であるといふが、かゝる場合に於ても、働くものは質料でもなく、形相でもなく、兩者を結合するものでなければならぬ。アリストートルの變することなき形相とは、限定せられた一つの形相ではなくして、無限の働きでなければならぬ。何時でも親があつて子が生れるといふが、子を生む形相は又親を生んた形相でなければならぬ。造られたものは、何物かから、何物かに、何者かによつて造られると云ふが、造る何者かがその本体でなければならぬ。生物に於ては、それが生物の生命であり、藝術的作品に於ては、それは我々の精神作用である。物質には働くといふことはない、木が闕となるも、鳴居となるも、木自身に變化はない。又單なる形相も變するものではない、家の形相は何から造られても同じである。唯造る者の立場に於て、一は潜在的質料となり、一は現實的形相となる。併し現實的形相に對する潜在的質料は、亦一種の形相でなければならぬ。斯く考へることによつて、アリストートルの云ふ如く、形相が働くものと考へられるのである。質料と形相と之を結合するものとが、別々である場合、作用としての本体は考へられないが、此三者が一つとなつた時、卽ち自分から自分を形成する時に、作用としての本体の考が成立つのである。所謂主体なき作用

substratlose Tätigkeit に至つて、眞に働くものの概念に到達するのである。質料と形相とが單に一つであれば、純なる形相に過ぎない、兩者が異つてゐて而も一なる時、働くものとなるのである。（未完）